

仙人の会 1月例会 (2001年1月28日 法政大学)

題目: 「南越」をめぐる歴史意識と世界像 ベトナム歴史書と広東地方志における「趙佗」の人物評価をめぐって

発表者: 吉開将人 (東京大学東洋文化研究所研究機関研究員)

### 【報告内容要旨】

はじめに

「呉越同舟」などの故事で広く知られるのは、秦始皇帝による統一以前の「越」の歴史だが、実はそれが滅んだ後も、中国大陸の東南部からベトナムにかけての地域には、「越」を標榜する勢力が繰り返し現れた。本報告は、その一つである「南越」に関する研究である。

南越とは、今日の中国広東省を中心とする地域において、もと秦の派遣した地方官であった趙佗という人物が、秦漢交替期の内地の政治的混乱に乗じて建国し、内地の漢王朝と並立するかたちで、およそ一世紀にわたって存続した「南越国」のことを指す。

報告者は、先に「印からみた南越世界 嶺南古璽印考(前・中・後篇)」(『東洋文化研究所紀要』第136・137・139冊、東京大学東洋文化研究所、1998年12月・1999年3月・2000年3月)という一連の論文を発表し、その中で、南越国が今日の中国広東からベトナム北部にまたがる範囲に、独自の構造とイデオロギーを背景としながら、固有の天下国家を展開させていたことを明らかにした。

ここで注目されるのは、秦漢交替期に楚イデオロギーを復興した一連の楚政権と結び付く制度が、南越国の国家体制の一部に取り入れられていたという点である。漢の天下に接して樹立された南越国は、漢との国境地域やベトナム方面のフロンティアなど、その周縁部分に広大な境界世界を抱える中で、漢との相対関係を背景に、いわば歴史の境界に位置する楚イデオロギーを新たな伝統として再生させ、南越世界を形作る役割の一部を担わせたと考えられるのである。

中国内地との相対関係の中でいにしえの楚という歴史的存在が表象され、南越世界が複合的に形作られる過程とよく似たものとして注目されるのが、南越滅亡後二千余年にわたって、この地域において確認される、南越とその建国者である趙佗をめぐる歴史意識のあり方である。

今回の報告は、これを中国歴代王朝・ベトナム歴代王朝・広東地方レベルの三つの次元に分けて通時的に検討することによって、この地域における歴史世界としての構造的な連続性を明らかにしようとするものである。

中国歴代王朝については、正史の記述や官撰の地理書類の記述内容、および阮朝成立時における国号交渉過程によって、ベトナム歴代王朝については、『大越史記全書』に代表される歴代の史書類の体裁や記述内容、撰者の按語などによって、また広東地方レベルについては、地方志や地元読書人の随筆における歴史沿革や官績評価、人物伝の記述内容などによって、それぞれの歴史意識を読み取り、その変動のあり方をあとづけ、重層的な構造を明らかにしたいと考える。

#### 1、中国の王朝中央における歴史意識

南越の同時代を生きた司馬遷は、禹や越王勾践など前代の人物に連なる歴史的存在とされた東越とは対照的に、南越という歴史的存在をきわめて批判的にとらえていた。中国正史においては、その基本的姿勢がその後も貫かれる。

一方、官撰の地理書における今日の広東・ベトナム北部の記述について見ても、趙佗と南越の

歴史が史実として記録されないものはないが、趙佗の事跡は「竊拠」とされ、それが大義名分をもたない割拠にすぎないものとして批判的に扱われていたことがわかる。歴史上の人物としての趙佗への評価も、南宋の一時期に称王前における秦の龍川県令としての経歴が「名宦」の条に記録されることが見られたが、それ以外においてはそうした取り上げ方はなされていない。南越の歴史のみならず、それ以前における秦の官としての官績についても、評価の対象とは見なされていなかったことがわかる。

歴代王朝の趙佗と南越に対する批判的姿勢が、最も集約されたかたちで示されたのが、十九世紀初めの清代嘉慶年間における阮朝の国号問題であった。そこには単なる批判にとどまらず、領土的野心を深読みし、その存在さえ断じて許さないという確固たる態度が読み取れる。王朝中枢においては、いにしへの趙佗や南越に対し、ある種の脅威さえ抱いていたと考えられる。

## 2、ベトナムの王朝中央における歴史意識

ベトナムの修史事業においては、遅くとも十三世紀後半の陳朝までの段階で、南越と趙佗はベトナム正統王朝の起点としての位置付けを得ていたことが、文献史料そのものの記述によって確認される。

やがて、明による占領と黎利による撃退を経た十五世紀後半の黎朝下において、趙佗と南越はそれまでよりも一段階低く位置付けられるようになる。正統王朝としての位置付けは保ったものの、趙佗のかわりに雄王が正統の起点として新たに浮上し、「本紀」の起点としては呉権に地位を譲るのである。しかしこの時期においても自称の国号は「大越」であり続けた。

その後、趙佗と南越の地位は徐々に低下を続け、十六世紀初めの武瓊の段階では、「本紀」の起点は呉権からさらに丁部領に引き下げられ、趙佗の歴史は「外紀」のより奥深いところに追いやられる結果となる。そして十八世紀末の西山朝では、徹底的な批判を受けて、趙佗と南越はついに正統の枠外に置かれるのである。この考え方は続く阮朝にも受け継がれ、『(欽定)越史通鑑綱目』のように、そうした歴史意識をより明確に反映させた歴史書が編纂され、また従来型の「大越」をやめて「大南」という新たな自称の国号が採用されるに至る。この「大南」は、長期政権の自称国号としては初めて「越」字を排したものである。この結果、国号の中の「越」字は、中国との冊封関係において機能する「越南」という国号の中だけに残されることになる。

## 3、現地レベルにおける歴史意識

すでに述べたように、中国の王朝中央では、趙佗と南越に対して、一貫して批判的姿勢が維持されてきた。趙佗の行為を大義名分論的に「割拠」として批判し、時にはその「亡霊」におびえた中国歴代王朝における趙佗と南越に対する歴史意識のあり方を読み取ることができる。

これに対し、広東で編纂された地方志では、時間を経るにつれて、趙佗の事績に対し、より多くの紙幅を割いて評価が与えられるようになっていく。趙佗と南越の歴史的地位は、地元においては徐々に高まっていったと考えられるのである。

地方志とはまた異なる次元のものとして位置付けられるのが、地方志編纂にも参加した地元の読書人層の多様な思想とその著述活動である。それが地方志にも一部反映されて、現地における歴史意識全体に変動を生み出すきっかけとなった。これを特徴付けるものは「越/粵」ナショナリズムというべき思想である。十六世紀半ばから、欧大任『百越先賢志』のように、戦国以来の「越」を歴史意識として強く打ち出し「百越」世界を志向する「越」ナショナリズムが急速に高

まり、十七世紀には屈大均『廣東新語』のように、明末清初という時代背景がもたらした「大漢主義」と「越」ナショナリズムの間で思想的なねじれさえ現れる。ところが十八世紀から十九世紀にかけての時期になると、それまでの「百越」世界を志向する「越」ナショナリズムにかわって、今度は等身大の広東(粵東)を志向する「粵」ナショナリズムが顕在化するようになり、(道光)『廣東通志』のような趙佗や南越史に対する余分な評価を切り捨てた無難な地方志表記のあり方が現れるのとほぼ同時に、梁廷楠『南越五主伝』のような広東等身大の歴史叙述・考証のあり方が目立ち始めるのである。

#### 4、小結

以上の議論は以下のように整理することができる。

まず中国の歴代王朝下において、王朝中央と地方レベルでは、時間を経るにしたがって趙佗と南越に対する歴史意識に少しずつ乖離が生じていた。地方レベル内部においても、官撰の地方志類と私撰の随筆類の間では、相互の歴史意識に微妙な温度差があった。

広東における歴史意識の転換期は、十六世紀半ば(黄佐)と十九世紀前半(阮元・梁廷楠)の二つの時期にあったことになる。その間の十六世紀後半から十八世紀前半までの二百年は、趙佗と南越をめぐる歴史意識にとって、過渡期としての性格が強い。

すでに見たように、ベトナムでは趙佗と南越をめぐる歴史意識について、黎朝創業後の十五世紀半ばと西山朝の十八世紀末頃に、二度にわたる転換期があった。具体的な時期としては広東のそれと一致しないが、大局的に見れば、ほぼ前後する時期に国境を隔てたそれぞれの地で、趙佗と南越をめぐる歴史意識に転換が起きていることが確認される。

広東では趙佗と南越の歴史が地位を高め、ベトナムではその地位が低下していった。こうした相反する動きが、それぞれの地でほとんど並行しながら展開していたことになるのである。

#### 5、歴史意識と「世界」像

以上の議論を、南越や趙佗が表象する歴史地理的空間イメージ、つまりそれぞれの時期の「世界」像という角度から整理してみることにしたい。

ベトナムが中国の版図の中にあつた唐代以前においては、嶺南からベトナム北部にかけてを一体のものとしてとらえる歴史意識が存在し続けていた。趙佗にかかわるいくつかの伝承などを記録した『交州記』『広州記』はこのような歴史意識の上に立った著述とすることができる。この時期には、趙佗をめぐる民間信仰もまた、今日の国境を越えた広がりの中で根を下ろしていた。

しかしこの時期においても、梁代の李賁や隋末の土豪馮氏・李襲志などに見る限り、趙佗と南越をめぐる歴史意識は、ベトナム・嶺南ともにそれぞれの地域だけを視野に入れた表象のあり方として認めることができるのみである。両地域に趙佗と南越をめぐる歴史意識は共有されていたにもかかわらず、それを一体の「南越世界」としてとらえる発想は、すでに時代の趨勢ではなくなっていたことがわかる。「南越」の世界像は、すでにそれぞれの地域の内部にまで縮小してしまっていたのである。

宋代以後、ベトナムが中国から離脱し、「外国」としての位置付けを得るようになると、中国側では南越の存在自体が地理書の記述から消えることもあった。そして明の永楽帝によるベトナム遠征が挫折し、その地の「回収」が不可能であることが明確になると、嶺南方面からベトナム北部を見通し、それを一体のものとして議論する世界像は、中国側の文献から完全に姿を消すこ

とになる。

これにかわるものとして十六世紀前半の広東に現れたのが、嶺南から東南中国全体を見据え、その歴史を「百越」の歴史の中に位置付けようとする発想である。こうして南越をめぐる世界像は一気に東南中国全体へとひろがることになった。その一方で、趙佗の事績を客観的な歴史として評価していく動きが始まっていく。十六世紀から十八世紀までの二百年間、趙佗と南越は地元広東で様々な議論されながら、その歴史的地位を確実に高めていったのである。

一方のベトナム側では、十三世紀の元寇を契機に自らの歴史叙述が始まった。そこで趙佗は王統の起点であるベトナムの正統王朝として位置付けられ、南越の歴史はベトナム史の重要な構成要素として大いに称揚されることになった。

この時期、隣り合う嶺南地方では、先に述べたように、ベトナムを視野から切り離し、目を東南中国の「百越」の地に向ける状況が生まれつつあった。

しかし、一方のベトナム王朝においては、かえって中国の嶺南方面を見据え、それを一体のものとして「わが越」の地理的範囲を想定し、それを含めた統一を志向する独自の「大一統」理念が存在し続けた。十三世紀から十五世紀にかけて、ベトナムの王朝下には、ベトナム北部と嶺南にまたがる範囲を一つの歴史世界とする意識が明確に存在し続けていたのである。この時期、南越がベトナムの正統王朝に位置付けられ、その歴史が称揚されたのは、こうした地理的な発想と表裏一体のものであったと考えられる。

ベトナムの歴史叙述に初めて変化が現れるのは、明の永楽帝の進攻を退けて建国された黎朝下においてである。その後、十五世紀後半から十八世紀末までのおよそ二百五十年は、南越が正統王朝としての位置付けを維持しながらも、王統の起点としての地位を雄王に譲り、その歴史が「外紀」に置かれるなど、一貫して歴史的な地位を低下させていく過程であった。

その裏返しとして、ベトナム独自の神話や伝承に裏付けられた涇陽王・貉龍君・雄王がいにしえの聖王として歴史的地位を獲得していった。そしてこれと連動して、中国領内の嶺南の地をベトナムと一体のものとしてとらえる発想が、ベトナム側で急速に衰えていったのである。

一方、これとほぼ同時期の明代から清代半ばにかけての広東でも、趙佗の評価をめぐる過渡的な状況が現れた。それは、大きな潮流としてとらえるなら、趙佗と南越が客観的な歴史的存在として正当な位置付けを模索していく過程であった。その中で、趙佗と南越は、徐々にだが確実にその地位を高めていったのである。

その後のベトナムでは、十八世紀末の黎朝末期の呉時仕に至り、南越が非正統王朝として明言され、趙佗に対しても厳しい批判が加えられるようになる。そこではもはや「わが越」としての世界像は、現実の国境の北側にある中国の嶺南地方を組み込まないものとして定義されている。続く阮朝では、自称国号からついに「越」字が除かれ、「大南」として自らを規定するに至った。

これに対して中国側では、十九世紀前半になると、阮元や梁廷楠によって、趙佗と南越の歴史に穏当な位置付けが与えられるに至る。阮元は、評価の分かれる趙佗の事跡を切り捨て、その官績だけを簡潔に地方志に記す体裁を確立した。一方の梁廷楠は、南越の歴史を、南漢と並び、正統論的評価の対象や「百越」の歴史の一部としてではなく、「粵東」である広東を特徴付けるものとして位置付け、それに対して緻密な考証を加えたのである。

呉時仕、阮元、梁廷楠の三人はきわめて近い時代を生きた歴史家だが、それぞれの歴史叙述の動機付けはまったく違うところにあった。にもかかわらず、呉時仕にとっては黎朝末期の「大越」、阮元・梁廷楠にとっては「粵東」である広東の、いずれも「等身大」の歴史像が模索されていた

という点では、三者の間に本質的に共通する姿勢が読み取れる。

つまり、ベトナムと中国においては、趙佗と南越をめぐる、一見すると正反対のように歴史意識の形成が進んでいたように見えるが、その背後においては「世界」像の転換と拡大・縮小がほぼ同時期に展開していたのであり、中越双方の歴史家たちの間にも、きわめてよく似た問題意識があったことがわかるのである。

その変容のあり方は、歴史意識の場合と同様に、表裏一体の関係と呼ぶのがふさわしい。そしてそれを規定したのが、中越関係の歴史的展開と、それぞれの地域の置かれた時代状況であったと考えられるのである。

これは趙佗と南越という歴史的存在が、この地域において占める位置とその大きさを物語るものであると同時に、この地域全体が、南越滅亡後も一つの歴史世界としてのあり方を維持したことを物語るものである。

南越は百年で滅びたが、その遺産はかつて南越世界が展開したこの地域において、今日まで受け継がれていると考えるべきである。

\* 本報告は、2000年10月に東京大学に提出した博士学位申請論文『南越史の研究』第二部の「『南越』をめぐる歴史意識 歴史の中の『南越』像」の内容に基づくものであり、2001年度の『東洋文化研究所紀要』に全文の発表を予定している。